奈良女子大学附属3校園合同研究開発

第一回　運営指導委員会

奈良女子大学附属小学校　集会室

(2006.7.3.mon.　14:00～17:00)

奈良女子大学附属幼稚園

奈良女子大学附属小学校

奈良女子大学附属中等教育学校

資料目次

本日のプログラム　・・・1

出席者一覧　・・・2

資料１・・・本研究開発の概要　・・・3

資料２・・・研究開発事業計画表　・・・9

資料３・・・幼小連携 WG 報告　・・・10

資料４・・・小中等連携 WG 報告　・・・12

資料５・・・幼小合同公開研究会要領　・・・15

本日のプログラム　　司会　　谷岡　義高　（ 附属小学校 ）

14：00～14：05　挨拶：水上 戴子　(附属学校部長)

14：05～14：10　参加者の紹介

14：10～14：30　研究開発実施計画の概要説明
：荒木 ユミ　(附属中等教育学校)

14：30～15：30　本年度の活動計画の説明
幼小連携WG　：松田　登紀　(附属幼稚園教諭)
小中等連携WG　：日和佐　尚　(附属小学校教諭)
幼小合同公開研究会　：柿元みはる　(附属幼稚園教諭)

15：30～15：40　休憩

15：40～16：55　指導と協議

16：55～17：00　挨拶：諸岡　英雄　(附属小学校長)

■運営指導委員

氏　　名	所　　属	職　名	備考（専門分野等）
無藤　　隆(欠)	白梅学園大学	学長･教授	発達心理学、幼児教育論
田中 耕治	京都大学	教授	教育方法学、評価理論
森脇 健夫	三重大学	教授	教育方法学、授業論
奈須 正裕	上智大学	教授	教育心理学、動機づけ理論
藤村 宣之	名古屋大学	助教授	教育心理学、認知発達論
前田 景子	奈良県立教育研究所	指導主事	
松本 知子	奈良市教育委員会	指導主事	
河月 和代	大和郡山市教育委員会	主幹	
杉峰 英憲	奈良女子大学	教授	教育方法学、カリキュラム論
麻生　　武	奈良女子大学	教授	発達心理学、子どもの生活世界

■附属学校園関係者

氏　　名	所　　属	職　名	所属等
水上 戴子	奈良女子大学	教授	附属学校部長
浜田寿美男	奈良女子大学	教授	附属幼稚園長
諸岡 英雄	奈良女子大学	教授	附属小学校長
植野 洋志	奈良女子大学	教授	附属中等教育学校長
森本伊津子	附属幼稚園	副園長	
中谷内政之	附属小学校	副校長	
勝山 元照	附属中等教育学校	副校長	
吉田 信也	附属中等教育学校	副校長	研究開発統括委員
松田 登紀	附属幼稚園	教諭	研究開発統括委員 幼小WG
柿元みはる	附属幼稚園	教諭	研究開発統括委員 小中等WG
飯島 貴子	附属幼稚園	教諭	幼小WG
日和佐 尚	附属小学校	教諭	研究開発統括委員 小中等WG
谷岡 義高	附属小学校	教諭	研究開発統括委員 幼小WG
堀本三和子	附属小学校	教諭	幼小WG
阪本 一英	附属小学校	教諭	小中等WG
荒木 ユミ	附属中等教育学校	教諭	研究開発統括委員会事務局
大内 淳也	附属中等教育学校	教諭	小中等WG
野上 朋子	附属中等教育学校	教諭	小中等WG

■大学関係者

氏　　名	所　　属	職　名	所属等
中島　道男	奈良女子大学	教授	研究開発統括委員長
本山　方子	奈良女子大学	助教授	研究開発統括委員　幼小WG
天ヶ瀬正博	奈良女子大学	助教授	研究開発統括委員　小中等WG

060703
奈良女子大学附属3校園合同研究開発
第一回運営指導委員会

研究開発実施計画の概要

荒木　ユミ

奈良女子大学附属中等教育学校
研究開発統括委員会事務局

1

研究開発課題

幼・小・中等15年間にわたり、事物認識とその表現形式の徹底化を通して、独創的で「ねばり強い」思考能力を育成する教育課程の開発

2

はじめに・・・学校園概要

奈良女子大学附属幼稚園

〇生き生きとした明るい子ども
〇考えてやり抜こうとする子ども
〇美しくあたたかい心の子ども

3歳児		4歳児		5歳児		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
31	2	63	2	59	2	153	6

3

はじめに・・・学校園概要

奈良女子大学附属小学校

〇開拓・創造の精神を育てる
〇真実追求の態度を強める
〇友愛、共同の実践を進める
奈良の学習法
「しごと」「けいこ」「なかよし」

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級
80	2	76	2	78	2	77	2	74	2	74	2	459	12

4

はじめに・・・学校園概要

奈良女子大学附属中等教育学校

〇自由で自立した人格と、社会的責任の自覚を養う学校
〇多様な能力に対応し、それらをのばせる学校
〇社会、世界に開かれた学校

自由・自主・自立

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級
122	3	123	3	123	3	120	3	122	3	115	3	725	18

5

目的

幼稚園3歳児から中等教育6年生までの15年間を通して、事物認識やその表現の発達を促すため、「モノ」や「コト」の質感や構造の探求に向けたコアになる活動を新たなカリキュラムして編成すること

前半6年間・・・幼稚園から小学3年生
後半9年間・・・小学4年生から中等6年生

6

研究仮説

1　創造的でねばり強い思考力は、探索能力、観察能力、表現能力に基づく

→周囲の世界との関わり
「探る－　観る－　表す」、相互連関的

2　「モノ」から「コト」への発達的拡張

3　独創性・・・個別経験と他者との共有

7

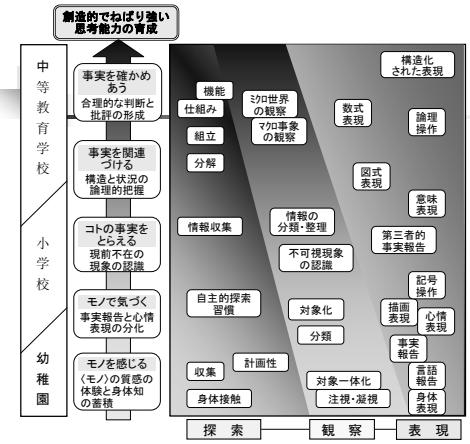


図1　15年間の事物探究活動で育つ事物認識とその表現形成（仮説）

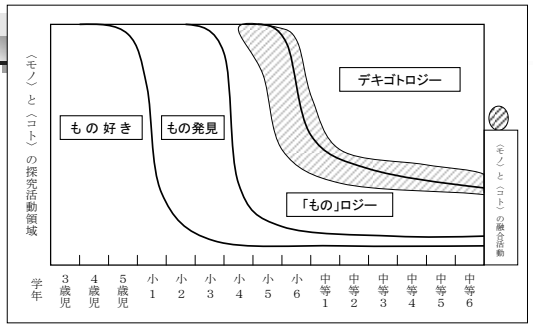
8

研究概要・計画

1　　新領域カリキュラム編成

どんな活動をカリキュラム化していくのか

9



10

1新領域カリキュラム編成

○　幼稚園から小学3年生

・・・「もの好き」から
「もの発見」へ

11

1新領域カリキュラム編成

☆幼稚園から就学移行期

「ものたんけん」
・・・身近なものの探索、直接観察、直接接触
→「もの」への興味、身体知

「ものがたり」
・・・言語報告。他者との共有。事実と意見の分化の萌芽

「ものづくり」
・・・集中力と持続力。他者との協同

12

1新領域カリキュラム編成

☆小学校低学年

・環境の空間的拡大
　・・・近隣、博物館などの施設、地域環境、文化財環境などに存在する自然物や人工物の自主的探索

・個別活動と集団活動の両面からのアプローチ
・「もの」に対する探究価値の発見
・「もの」の収集、分類、関連付けから持続可能な長期の独自テーマの発見、設定
　→「モノロジー」への移行

13

1新領域カリキュラム編成

〇小学４年生から中等６年生

・・・「ものロジー」から

「できごとロジー」へ

14

1新領域カリキュラム編成

〇　小学4年生から中等6年生

現前のできごとから日常的できごとに対する
「探る－　観る－　表す」
↓
自然事象、国際的事象、歴史的事象などの「できごと」に対する
「探る－　観る－　表す」
時間的、空間的ひろがり。活動の拡張、深化

15

1新領域カリキュラム編成

〇　小学4年生から中等6年生

「探る」(デキゴト探索)
　・・・できごとや事象に対する徹底的、多視点的情報収集

「観る」(デキゴト観察)
　・・・収集データの読み解き、分類、分析、関連づけからの 事実の理解

「表す」(デキゴト報告)
　・・・事実報告の徹底、自分の考えや心情記述との区別

16

1新領域カリキュラム編成

〇　小学4年生から中等6年生

・　問題発見能力と課題解決能力の育成

・　報道と批評の区別、信頼性、適切性のあり方を学ぶ

・ 自主テーマについて、観察、分類、仮説構成、予測、検証、報告の長期間の活動の促し

・　表現形式の発展　・・・　描画、言語、図式、数式

17

研究概要・計画

★　新設カリキュラム編成の留意点

18

★新設カリキュラム編成の留意点

1．教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係

教科の学習

実証的思考方法・・・↑↓・・・基礎的認識技法
持続的探求態度・・・

事物探究活動

追究の深化、特化・・・↑↓・・・ねばり強い思考力
実証的活動

総合的な学習

19

★新設カリキュラム編成の留意点

1．教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係

幼稚園

・・・「環境」領域を中心に
領域内の活動範囲の適切化、細分化、発達に応じた編成

遊び経験　→　試行錯誤的問題解決　→　幼小間の学びへの接続

20

★新設カリキュラム編成の留意点

2．環境資源の積極的活用

○活用可能な環境資源の開発

人工物・植生

地域、大学、博物館、美術館、遺跡、文化財

→　ホンモノ

21

研究概要・計画

2　学びの協同性育成のための取り組み

22

2 学びの協同性育成のための取り組み

(1) 校種間連携活動

「はてな　？　の広場」

異校種異学年の子どもたち同士の
「モノ」「コト」を介した学びあい、教えあいの交流

(2) 異学年合同活動

23

2 学びの協同性育成のための取り組み

(3)「おたずね」と対話の形成

「おたずね」

・・発表者や集団に対して「気になること」「わからないこと」「不安なこと」を自由に訊くことのできる言語的反応

★発表を媒介にした対話の形成→学びの深化

24

研究概要・計画

３　教育課程開発を支援する取り組み

25

３ 教育課程開発を支援する取り組み

(1) 素材、学習材開発

校内、園内の遊具、用具

＋自然環境、人工的物質環境

利用可能な素材を校内にもちこむなど新たな資源開発

→　子どもたちの新たな気づき、興味、探究の引き出し。

26

３ 教育課程開発を支援する取り組み

(2) 指導法開発

子どもたちの自主的、独創的活動を引き出すための
指導の適時性、適切性

・子どもの「モノ」「コト」への愛着と持続的興味を自然に促す環境構成と相互作用
・子どもの表現意図を理解したうえでの対話への導き
・教師による適時の「試し」「促し」
・「探る－観る－表す」の有機的結合を促す指導のあり方
・独自学習－相互学習－独自学習の指導による自律的、探究的な学習習慣の形成
(附属小学校)
・異校種間のティームティーチングのあり方　　など

27

３ 教育課程開発を支援する取り組み

(3)評価法開発

・短期的－長期的発達の観点

・学びの経験の質の評価に関する方法

28

３ 教育課程開発を支援する取り組み

(3)評価法開発

１ 長期にわたる発達評価

教師による評価・・・「長期達成過程多項目評価」

入園、入学以降の達成過程の多項目評価の蓄積
・短期的には指導評価として活用
・長期的に蓄積しカリキュラム連携の成果の
フィードバック
★質問紙　　看取りの記録　　エピソード記述

29

３ 教育課程開発を支援する取り組み

(3)評価法開発

１ 長期にわたる発達評価

子どもによる評価

自らの活動記録の蓄積「足跡ボックス」
ポートフォリオ評価法を基盤に

30

3 教育課程開発を支援する取り組み

(3)評価法開発

2　事物探究活動の質をくみ取る評価次元の導入

- 自律的な学習の次元
- 活動展開の次元･･･「探る－観る－表す」
- 問題解決展開の次元
- 活動の次元
- 二次的自律的学習の次元

キーワード････「学びの能動性」

31

研究概要･計画

1　新領域カリキュラム編成

2　学びの協同性育成のための取り組み

3　教育課程開発を支援する取り組み

- 素材、学習材開発
- 指導法開発
- 評価法開発

32

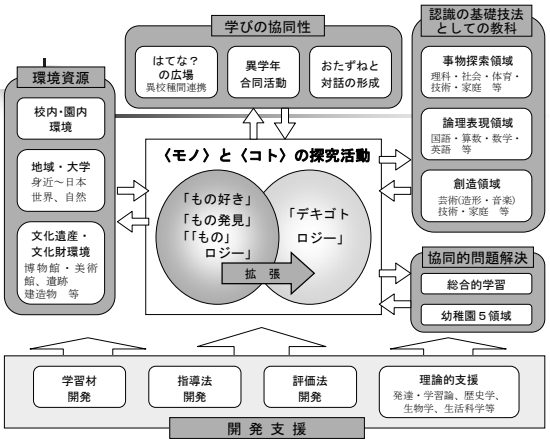
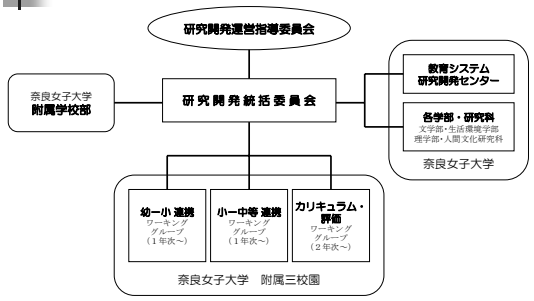


図4　事物認識とその表現形成に関わる教育課程開発の全体図

33

研究組織



34

ご指導をよろしくお願いいたします

35

奈良女子大学附属3校園研究開発事業計画（予定を含む）

年度	月	研究計画 新領域カリキュラム編成	学びの協同性の取り組み	教育課程開発支援	評価計画	全体として	行事	文科省関係
2006年度	4月	●新領域カリキュラム編成の試行 ・各校園 ・校種間の接続性の検討 ●各教科、総合的学習、幼稚園5領域との有機的相互関係の検討	・「はてな?のひろば」の試験的導入に向けての検討	●長期にわたる発達評価の導入に向けての方法の検討 ●事物探究活動の質をくみ取る評価次元の導入と評価方法の検討 ●子どもの自主的で独創的な活動を引き出す指導法の検討 ●学習材開発の検討	●年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」など多角的な実態調査を行い、研究成果を評価するための基準の設定 ●「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録 ●実践事例の集積と3校園合同での分析、検討、評価	●定期的な3校園合同研究会による研究遂行のモニタリング、分析、評価 ○研究開発統括委員会(月1回) ○幼小連携WG(月1回) ○小中等連携WG(月1回) ★本学による研究支援 ・理論的支援 ・方法的支援 ・その他支援 ○教育システム研究開発センター ○附属学校部 ○各学部 ○大学院 人間文化研究科		
	5月							
	6月						第一回研修会(幼稚園主催)	連絡協議会
	7月		かがくのひろば(幼小中等)				第一回運営指導委員会	
	8月						第二回研修会(3校園合同)	
	9月		給食交流・虫取り交流(幼小) 学園祭見学(小中				第三回研修会(小学校主催)	
	10月		小学生の中等授業体験(小中等)				第四回研修会(小学校主催)	
	11月						第二回運営指導委員会	
	12月		総合学習発表会への参加(小中等)					
	1月							
	2月				公開研究会を実施し第一年次の研究成果の公表。評価をえる。		公開研究会兼第3回運営指導委員会	研究協議会
	3月				年度末に長期時系列記録・追跡記録の分析を行い、一年間の研究成果の評価を行う。			・報告書提出 ・自己評価書 次年度計画案の提出
2007年度	4月	第一年次の研究を成果の評価に照らして補充や拡充を加え、本格化させる。 ●新領域カリキュラムの実施	第一年次の取り組みをふまえて、学びの協同性育成のための取り組みの実施 「はてな?のひろば」	第一年次の取り組みをふまえて、教育課程開発を支援する取り組みの充実 評価法の更新	●年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」など多角的な実態調査を行い、第一年次の研究成果を評価する。 ●「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録 ●実践事例の集積と3校園合同での分析、検討、評価	●定期的な3校園合同研究会による研究遂行のモニタリング、分析、評価 ○研究開発統括委員会 ○幼小連携WG ○小中等連携WG ○カリキュラム評価WG ★本学による研究支援 ・理論的支援 ・方法的支援 ・その他支援 ○教育システム研究開発センター ○附属学校部 ○各学部 ○大学院 人間文化研究科	●年間3回程度の研修会を行う。	
	5月							
	6月						第1回研修会	連絡協議会
	7月						第1回運営指導委員会	
	8月						第2回研修会	
	9月							
	10月							
	11月				公開研究会を実施し第二年次までの研究成果の公表。評価をえる		公開研究会兼第2回運営指導委員会	
	12月						第3回研修会	
	1月						第3回運営指導委員会	
	2月							研究協議会
	3月				年度末に長期時系列記録・追跡記録の分析を行い、第2年次と二年間の研究成果の評価を			・報告書提出 ・自己評価書 次年度計画案の提出
2008年度	4月	第二年次を引き継ぎつつ、より進展された研究開発の確立と評価に向けての作業を行う。			●年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」など多角的な実態調査を行い、2年間の研究成果を評価する。 ●「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録 ●実践事例の集積と3校	●定期的な3校園合同研究会による研究遂行のモニタリング、分析、評価 ○研究開発統括委員会 ○幼小連携WG ○小中連携WG ○カリキュラム評価WG ★本学による研究支援 ・理論的支援 ・方法的支援 ・その他支援 ○教育システム研究開発センター ○附属学校部 ○各学部 ○大学院 人間文化研究科	●年間3回程度の研修会を行	
	5月							
	6月						第1回研修会	連絡協議会
	7月						第1回運営指導委員会	
	8月						第2回研修会	
	9月							
	10月							
	11月				研究開発の評価と成果公表のための公開研究会を行う		公開研究会兼第2回運営指導委員会	
	12月						第3回研修会	
	1月						第3回運営指導委員会	
	2月	3年間の研究成果のとりまとめの作業に入る。			年度末に長期時系列記録・追跡記録の分析を行い、3年間の研究成果の			研究協議会
	3月	3年間の総括的評価を行い、研究成果のとりまとめを行う。						・報告書提出 ・自己評価書提出
年度	月	研究計画			評価計画	全体として	行事	文科省関係

2006 年度　第一回運営指導委員会　　20060703

資料３　幼小連携 WG 報告　　報告者　松田　登紀 （附属幼稚園）

本年度の活動計画

○研究計画

（１）新領域カリキュラムの編成の試行（P4）

・ 幼稚園では、現在の幼稚園教育課程を「探る－観る－表す」の有機的結合の視点で捉え直し、＜モノ＞を探究する「もの好き」活動を導入する。

・ 小学校では「奈良の学習法」として「しごと」「けいこ」「なかよし」からなる教育構造をもって教育実践を行っている。現在「学習力を育てるすじ道」に焦点を当て、検討を加えている。

・ 「エピソード記録」、「個別記録」、「育てたい姿」の3つの柱から見えてくる「子どもの事実」を言語化することで、新領域カリキュラムを編成し、幼－小カリキュラム連携を試行する。これらの記録を「探る－観る－表す」のフレームから見直すことで、「もの」との関わりについて、幼－小間の接続性や非連続性が見えてくると思われる。

（２）各教科、総合的学習の時間、幼稚園５領域との有機的相互関係の検討（P7）

（３）環境資源の開発と積極的活用（P8）

・素材・学習財化に向けた校園内環境資源と地域環境資源の見直しを行う。

（４）学びの協同性育成のための取り組みの実施（P8）

① 小集団を単位とした、幼－小、小－中等、幼－中等の校種間連携活動「はてな？の広場」の試験的導入

・ 現在、幼－小の校種間連携活動について日程及び交流内容が決定しているものは以下１）～４）の通り。活動の目的なども含めた指導案については、次回の WG で検討する。

１）3 年月組が幼稚園環境を活用し、学習時間をもつ。
日時：2006 年 9 月 13 日（水）　10:00－10:40

２）幼稚園年長児が附属小学校を初めて訪れ、「学習」を経験する。
日時：2006 年 9 月 20 日（水）　10:00－10:40

３）幼稚園年長児　と　5 年月組　の交流活動①
・小学校を初めて訪れた幼稚園児が、5 年生に小学校を案内してもらう。
・子ども達がじっくりと＜モノ＞を介して学びあい教えあいの時間をもてるよう、音楽室や造形室など場所を限定し、「コーナー」を設ける。
日時：2006 年 9 月 20 日（水）　11:00－11:30

４）幼稚園年長児（1･2 組）　と　5 年月組　の交流活動②
・一緒に給食をいただく。

日時：2006 年 9 月 20 日（水）　　11:30－

・ その他、幼稚園児（年長児）の「低学年なかよし集会」への参加も含めた「はてな？の広場」（異校種間連携活動）を実施する（11 月～2 月）。

②異学年合同活動

・小学校においては「なかよし集会」、幼稚園においては「なかよしクラブ」を実施する。

③「おたずね」の幼稚園への試行的導入と小学校での再評価

・ 学びの深化につながる対話形式のあり方を追究するため、3 歳から就学移行期の言語表現形成過程について、子どもの実態を把握する。

（５）教育課程開発を支援する取り組み（P9）

・ 幼稚園では日々のエピソード記録、小学校では授業記録を基に、素材や学習材・指導法を開発、検討していく。これらは、実践を積む中で随時行う。

（６）評価法の開発（P10）

・ 「長期にわたる発達評価」については、幼稚園での「個人ファイル」の評価項目を検討し、就学移行期における活用を検討する。

・ 小学校では、ポートフォリオ評価法を基盤とした「学びのカルテ」作成の可能性を探る。

○評価計画

年次評価計画には、以下のものがある。

（１）年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」をはじめとした各種の評価法による多角的な実態調査を行い、研究成果を評価するための基準を設定する。

（２）「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録を行う。

（３）年度末に「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録の分析を行い、１年間の研究成果の評価を行う。

■運営指導委員にご指導頂きたい点

1. (1) における実態調査に用いる質問紙などについては研究中である。小学校入学時に、児童には幼稚園と小学校の違いや困難などについて、また、保護者には児童の日常生活での事物へのこだわりの有無などについて調査する計画であるが、質問内容やその分析等について、ご意見を頂きたい。
2. (2)、(3) については、現在、「個別記録」及び「エピソード記録」を積み重ねている。このような形の記録でよいか、さらにデータを収集するとすれば、どのようなものが考えられるかをご指導頂きたい。
3. 言語的相互作用と非言語的相互作用の変化を評価する予定であるが、そのための具体的方法や評価基準・評価の観点などについて、ご助言願いたい。

2006 年度　第一回運営指導委員会　　20060703

資料４　小中等連携 WG 報告　　報告者　日和佐　尚　（附属小学校）

本年度の活動計画について

１.「かがくのひろば」を実施する。

・校種間連携活動「はてな？の広場」として、「かがくのひろば」の授業を実施する。
・お兄さん・お姉さんたちは、「ふしぎだな！すごいな！」という思いを感じられるようにする。
・中等の「サイエンス研究会」のメンバーによる授業を、幼稚園及び小学校にて行う。

※幼稚園会場

日時：平成 18 年 7 月 13 日（木）　10:00～11:30

内容：「スーパーボールをつくろう」3 歳（32 名）・4 歳（64 名）・5 歳（62 名）の幼児を対象にする。

１）司会（加藤先生）が趣旨を述べて、子どもの「あいさつ」で始め、中等のサイエンス研究会の方を紹介する。

２）スーパーボールの実物を見る。（作り方等は、資料１を参照）
＜遊戯室で全員に＞
※しばらくの間、各教室で幼児はケーキを食べている。（20 分間、準備する）

３）「ボールで遊ぶコーナー（遊戯室）」と「色付けしてカラフルボールを作るコーナー（遊戯室の一画をテーブルで区画して）」と「スーパーボールを作るコーナー（絵本の部屋前広場）」を設置し、子どもの願いに応じて楽しめるようにする。
※年齢によって分けるのではなく、普段の遊びの延長として、好きなコーナーに自由に行って遊ぶ。全く別の遊びをしていてもかまわない。ただし、5 歳児は、各コーナーで楽しむものと予想している。

４）司会により、１１：２０に遊戯室（年長）で幼児が、感想とお礼を言う。
（竹内・飯島先生の指導による）

◎　研発の教師のかかわり

・ビデオ（学生アルバイト 4 名）－抽出児 4 人＋数名＜幼稚園で決めておく＞
・「もの好き」にかかわる幼児の思いを分析する。＜幼稚園で分析する－資料提示＞

Ｑ１.「ねばり強い子」「もの好きの子」の子どもの観察の仕方において、どのような観点で観察したり、それをどのようにまとめていったらよいのでしょうか。

※小学校会場

日時：平成 18 年 7 月 13 日（木）　13:40～15:30

内容：第 1 部（13:40～14:20）、第 2 部（14:30～15:10）月・星組は、交替する。
小学校 6 年生が参加する。
月組：「ラジコン・ロボット」於；集会室
星組：「火で文字を書こう・線香花火を作ろう」於；理科室

１）子どもの司会が「あいさつ」をして、中等のサイエンス研究会の方が紹介をする。

2）「ラジコンやロボット」「火で文字を書こう・線香花火を作ろう」の実物を見せる。
3）特に工夫したところや考えたことを発表する。
4）「おたずね」して詳しく知ろうとする。
5）子どもの司会が「ふりかえり」を促し、最後に「お礼の言葉」を言う。

○15:10～15:30　「振り返りの作文」を書く。各教室で書く。

Ｑ２．「振り返りの感想」は、ふつうに書かせた方がよいのか、あらかじめ振り返りの観点を決めておいた方がよいか？それならばどんな観点で書かせたらよいのでしょうか。

◎　研発の教師のかかわり

・ビデオ（学生アルバイト２名）－全体的な記録を映す。
・「ものロジー」から「デキゴトロジー」にかかわる、児童のつぶやきやそのときの活動や表情・反応の様子を記録する。＜小学校で分析する－資料提示＞

Ｑ３．このとき、記録に残すための要件は、何があるのでしょうか。

Ｑ４．以上のことをどのような観点から分析していったらよいのでしょうか。

２．「プレゼン総合学習「奈良」（仮称）」を実施する。

・校種間連携活動「はてな？の広場」として、「プレゼン総合学習「奈良」」の授業を実施する。
・中等２年生の「（9 月）奈良と京都のフィールドワーク」の活動をまとめて発表する「（12 月）プレゼン」に小学校５年生が参加する。（6 年生は、適正検査が間近なので適切ではないと判断した。）

※9 月以降に具体を検討する。

・会場は、中等教育学校。
・期日は、平成 18 年 12 月 18 日頃。（妥当な時に、ＷＧで、決定する。）
・発表を聞いて、「おたずね」で幅を広げ、質を深める。
・「ものロジー」から「デキゴトロジー」への移行とその様相を研究する。

※　研究の観点は、第５回のＷＧで検討する。柿本－日和佐－大内の 15 年間の発達研究が可能であるという特徴がある子どもたちである。

・とりあえず抽出児として、国松、長谷川、藤原、糸山、生田を選出した。15 年間における認識の発達を追尾して、「もの」「こと」への発達の有り様や変遷を研究するために、幼稚園での「子どもの姿」「どんな遊びが好きだったか」、小学校での「自由研究」等の関心の資料を、基にして考察をしていきたい。
・小学校における「自由研究」等の題材から、子どもの発達を研究することができる。
　学年をたてに見ると、子どもの認識の変容が見える、横に見ると、関心の傾向が見えるのである。

※中等２年生は、１年生の時、9 月に 5 日間集中的に午前中に「見る」、12 月に同様に「聞く」という活動を経験している。それをもとにして２年生で「（9 月）奈良と京都のフィールドワーク」活動を行うのである。

Ｑ５．小・中等に連絡する子どもの「もの」「こと」への変容やそのきっかけに関する研究をどのようにしていけばよいのでしょうか。

３．接続児童・生徒における年度当初の「能力に現れる研究成果の評価」や「長期達成過程他項目評価」を実施する。

・「能力に現れる研究成果の評価」については、中等１年生と小５年生で（幼･小ＷＧでは小１年で）の評価を行う。文章表現による問答法形式で行う。基礎データとして、集計・グラフ化を当面行い、必要に応じて分析を試みたい。

・「長期達成過程他項目評価」については、ポートフォリオを基にして適宜視点を決めて行うようにする。

Ｑ６．このようなアンケート方式で得られたデータをどのように分析すればよいのでしょうか。少なくとも校種間の違いをみることは行いたいのですが、大事なことは何なのでしょうか。また、他の観点でのアンケートが必要になるのでしょうか。

４．接続における中等学校の授業を受けて、小学生の感想からカリキュラムの接続の可能性を検討する。

・10/4（水）に行う。当日の感想文をコピーしておいて、それを「もの」「こと」の観点から発達を分析する。

５．中等の学園祭(9 月 16･17（土･日）)に参加することによって、自由研究の可能性を実感し、その感想をもとにして「もの」「こと」の観点からカリキュラムを検討する。

Ｑ７．４ 及び５について、感想文を書かせますが、私たちはそれをどう読めばよいのでしょうか。子どもは、自由に書きますが、研究開発の研究において何をどのように分析するかで困っています。感想文からのまとめ方をどのようにすればよいのでしょうか。

2006 年度　第一回運営指導委員会　　20060703

資料５　　報告者　柿元　みはる　（附属幼稚園）

平成１８年度　幼・小合同公開保育･学習研究発表会について

１．主題

「確かな学び　確かな力」

幼稚園　　―主体的に生活する中で「ねばり強い力」を育てる―

小学校　　―確かな力を培う学習法―

２．日時

平成１９年２月１５日（木）・16 日（金）

＊幼稚園の公開保育は 15 日のみ

３．日程

〈第１日目〉2 月 15 日（木）

小学校

8:15 8:45　9:15　9:30　10:15 10:30　11:15　11:30　12:30　13:30　14:30　14:45　16:15

受付	朝の会	移動	公開学習①	移動	公開学習②	移動	公開学習①協議会	昼食	公開学習②協議会	移動	小学校全体会

幼稚園

8:40　9:00　11:30　12:15　13:15　14:30　14:45　16:15

受付	公開保育	全体会	昼食	分科会	移動	幼稚園講演

〈第２日目〉2 月 16 日（金）

小学校

8:15 8:45　9:15　9:30　10:15　10:30　11:15　11:30　12:30　14:00　14:15　15:30

受付	朝の会	移動	公開学習③	移動	公開学習② 低学年集会		昼　食	分科会	移動	講演

４．第１日目全体会について

・研究報告（１年目）

・当日の保育について

５．第１日目分科会テーマ

A　幼稚園での学びを考える（幼稚園）

・幼稚園でのエピソード記録を基に主に３・４歳児の学びや教師の援助、環境のあり方について考える

B　学習につながるコミュニケーション力を考える　（幼稚園・小学校合同）

・5 歳児の言語表現に焦点を当てて、小学校への学習（附属小学校の「おたずね」）にどうつながるか、を考える。

C　異校種間連携を考える　（幼稚園・小学校合同）

・「かがくの広場」の実施から子どもの学びを捉え、異校種間連携の意義を考える

D　幼稚園から小学校への育ちを考える（個人追跡）　（幼稚園・小学校合同）

・附属幼稚園から附属小学校へ進学した子どもを対象にその育ちを追うことで、幼稚園から小学校への移行期間に必要な、また長期的に子どもの発達を捉えるために必要な教師の視点を考える。

６．（1 日目）講演について

幼･小連携についての講演を計画している

７．（2 日目）低学年集会について

・2 月 16 日（金）小学校の低学年集会に幼稚園の年長児が参加する。

（小学校１年月組と幼稚園１組の合同発表）